
君の物語

スクロール

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の物語

【Nコード】

N0424T

【作者名】

スクロール

【あらすじ】

月が綺麗な夜に散歩に出かけた俺が出会ったのは、ちょっと変わった女の子だった。ちよつと夢見がちで、楽しいことをやろうとするキサラと、退屈な日常から逃げ出したい俺。様々な思いが交差して、紡がれる俺たちの決して忘れられない大切な日々の物語。

ブログ（前書き）

超不定期更新ですが、気長に付き合っただけなら嬉しい限りです。

プロローグ

私は、静かに部屋から廊下へ出た。

玄関にたどり着くには、リビングの前を通らないといけない。

いつもなら何も気にすることなんてないんだけど、今はそうもいかない。

足音を立てないようにそろりそろりと足を進める。

忍者みたいに抜き足、差し足、忍び足。

リビングの前を通過して、最大の難関を突破して一息ついた時、背後からドンと扉が開く音がした。

「こんな時間に何処へ出かけるつもりだ！」

耳を劈く大きな声。

顔を真っ赤にして怒鳴るのは私のお父さん。

リビングのドアを乱暴に開けて、私の元まで大股で歩いて来ている。

だけど、そんなの気にする私でもない。

いつもと何も変わらない手順で靴を履きながら、いつもと何も変わらない口調で答える。

「別に、ちょっと散歩に出かけるだけよ」

「こんな夜中にどうして散歩に出かけるんだ!!」

お父さんに右手が私に伸びてくる。

だけど、私に届くことは無く空を切る。

「今は、お父さんと話をしたくないから」

そう告げて私は、家を飛び出していた。

お父さんが夜勤の時は散歩に出ることは無い。

だけど、それ以外の日はお父さんが帰って来る前に散歩に出ることにしてる。

いつもはお父さんが帰ってくる前に家を出て、お父さんが寝る頃

に家に戻るんだけど、今日は思った以上に帰りが早くていつもおりのタイミングで外に出ることが出来なかった。

妹たちに心配されるから、ああいう感じに怒鳴られるのを今まで避けていたのに……

私がかから飛び出したからといって、お父さんが外まで追いかけてくることは無い。

だって、私がいつも『散歩』と言って外に出た時は、いつもの公園に居る事を知っているから。

家から徒歩5分の距離にある公園。

走れば1分もかからず到着することが出来るし、家の窓からは公園が丸見えですぐに様子を確認することも出来る。

っていうか、その公園にいるって分かってるんだったら、私が外に出ようとしているのを見つけるたびに怒鳴るのは辞めて欲しいと思うんだけどね……

お母さん曰く、夜中に娘を外出させるのが心配なのだそうだ。

まあ、心配してくれるのは普通に嬉しい。

だけど、今は『お父さんと話をしたくない』っていう娘の気持ちも考えて欲しいと思う。

こんなの自分勝手だってことは、良く分かってるつもり。

だけどね、お父さんと『話をしたくない』って思ってる私の気持ちに気がついてるのに干渉してくるのはやめて欲しい。

だって、話をしても私の気持ちを汲み取ってくれないし、自分の意見を押し付けるだけで、私の意見すら聞いてくれない。

私の人生なのに、私の思ったこと、やりたいことをやらせてもらえないなんておかしいと思わない？

私は、お父さんの『お人形』じゃないのに……

気がついたらいつもの公園のいつもの場所へ来ていた。

ここまで歩いてきたんだけど、その間の記憶が曖昧だ。

まあ、意識してここまで歩いてきたわけじゃないから仕方ないん

だけど、無意識に足が運んでしまつくらいに、この『散歩』は私の体に染み付いてしまっているみたいだ。

「はあ〜」

無意識に溜息が出る。

公園の奥にある街が見渡せる場所、別名『空の庭』

どこかのお偉いさんがつけた名前らしいけど、街が見渡せる場所に横長のベンチが置いてあるだけ。

横長のベンチは二つ置いてあつて、街に向かって右側のベンチに腰を下ろす。

『空の庭』名前はカッコいいのに、ただ、景色のいい場所なだけ。そんな名前負け全開の場所が、私の定位置だ。

名前なんてどうでも良いし、私としては、この素敵な景色を見れたらそれで良いと思う。

見下ろす街の人々の生活の光で溢れている夜景を見ながら考える。

お父さんと話したくないって思ってる。

だけど、別にお父さんが嫌いなわけじゃない。

お父さんの言いなりになんてなりたくないって思ってる。

だけど、別にお父さんが全部悪いわけじゃない。

じゃあ、どうしてこんなことをしてるのか？

それは、自分でも分からない。

ただ、何もしないまま自分の気持ちを無視して自分の人生が決められるのが嫌なんだ。

その一言に尽きると思う。

自分のやりたい事と周りから望まれていることに違いが出てくるのは仕方が無いと思う。

だけど、私にはどうしてもこれだけは譲りたくないことがある。

だって、私は夢を叶えたいから。

他の人から見たら、とても小さな夢かもしれない。

だけど、私にしたらとても大事な夢なんだ……

そんなことを頭の中で考えながら、ふと見上げた空には星が無数に輝いていた。

綺麗に輝く星たちは、とても近くに見えているけど、本当は途方も無いほど離れている。

どれだけ近くに見えても、手を伸ばせた届きそうに思えても、どうしても届かない。

近いのに遠い、人の思いに似ているそれはとても悲しく思えた。

街はすっかりと夜の色に染まっている。

家々からは暖かい光が漏れていて、とても暖かく見える。

だけど、今俺が居るのは、夜の静寂に覆われた夜の道路。

太陽が輝いてる時は人通りの多い商店街だけど、今は全て店がシャッターを閉めていて人の気配がまるで無い。

家を出てから人に会ったのは、途中で立ち寄ったのコンビニの店員だけだ。

そこ以外は、どんなに目を凝らしてみても人の影さえ映らない。

まあ、夜なんだから影が見えないのは当たり前なんだけれども。

ただ、こんなにも人の気配が無いと、俺しか居ない異世界に紛れ込んだみたいに思えてくる。

……もし、本当に異世界に紛れ込んだなら、今の生活みたいに退屈を覚えることも無いんだろうけど、実際にそんなことありえることも無く、いつもの退屈な日常の延長線上に立っている。

現在の時刻は午後11時半を少し回ったところ。

こんな時間に外を出歩く人なんてほとんどいないし、例に漏れること無く俺も普段はこんな時間に外を出歩いたりはない。

今日はたまたま、外に散歩に出たい気分になっただけだ。

……って言っても、特別何か理由があって散歩に出たわけじゃなくて、本当に気まぐれなんだけれど。

自分の部屋から見上げた月がとても綺麗だったから、もつと良く見ようと思って街の高台にある公園へ向かっている途中。

右手に下げているコンビニの袋が歩くのにあわせて、ガサガサと音を立てる。

中に入っているのは缶コーヒーとおにぎり一つ。

別に、公園に長居するつもりは無いんだけど、途中でお腹が空いたり、喉が渴いたりしたら嫌だから買ってみた。

おにぎりとコーヒーが合うかどうかは疑問だけど。

商店街を抜けて、最後の信号を越えると後は公園までは一本道だ。ゆるく長い坂道をのんびりと登っていく。

『香澄町公園』ここが俺の目的地だ。

ブランコにシーソー、滑り台に砂場でジャングルジム。

あとは、ドッチボールのコートが3つくらい書けそうな広場があるだけ。

この公園には『空の庭』って名前の街を見渡せる場所があつて、そこにはベンチが置かれてある。

俺は、そのベンチに座つて、月を見るつもりだ。

坂道を登つていくと、ほんのりと明かりが灯っていた。

公園内に設置された外灯の明かり。

外灯同士の間隔はそれなりに離れているんだけど、公園を暖かい光で覆っているから薄暗い雰囲気は無い。

例えるなら、祭の日のちようちんのような、部屋の明かりのような明るさは無いんだけど不思議と気味が悪くないって言う感じだ。夜の8時とか9時ごろなら絶好のデートスポットで、恋人たちがいちやいちゃしてるらしいんだけど、今はそんな人影は見えない……っていうよりも、今は俺以外にこの公園に人がいないんじゃないか？

まあ、さすがに11時半を回った今の時間帯には人が居ることなんて無から当たり前だけど。

サクサクサクと足音を立てながら公園の中を進む。

『空の庭』は外灯の光があまり届かない場所にある。

だけど、今日みたいに晴れている日なら月明かりがベンチの周り
照らしていて、暗いつていう感じは受けない。

昔、姉貴と来たときと何も変わってない。

そんなことを思いながら、ベンチに座り空を見上げる。

そこには、部屋の窓から見た月よりも、もっと大きくて綺麗な月
が輝いていた。

「綺麗だ」

自然とそんな言葉が口からこぼれた。

俺の言葉が、夜の静寂に響いて反響する。

この夜の中に溶けて消えていくはずの言葉。

誰にも受け止められることなく消えていくはずだった言葉。

だけど、俺の言葉は消えることなく誰かに届いていた。

「今日の月はまんまるだね。雲もかかってなくてとても良く見える。
ほんとに綺麗だね」

声は俺が座ったベンチの隣から聞こえた。

声がした方を見ると、月の光に照らされて、とても幻想的な雰囲気
気をまとった女性が座っていた。

さっきここへ来たときは気がつかなかったけど、先客が居たいみ
たいだ。

見た感じ俺と同じ年かちょっと上くらい。年上だったとして大し
て差は無いと思う。

特別美人というわけでも、とびつきり可愛いわけでも無いんだけ
ど、とても親しみやすそうでもとても優しそうな顔立ちをしていた。
有り体に言えば、綺麗でしかも可愛らしい感じの人。

さつきとちよつと矛盾してるかもしれないけど、そんな感じだ。
同じクラスに居たら、男子からものすごい人気が出そうな感じと
言えば分かりやすいかな？

そんな人が、隣に座っていた。

こんな月が綺麗な夜だったからかもしれない。
もしかしたら、この場の雰囲気酔っていたのかもしれない。

『知らない人』だから、少しは警戒していたけれど、それ以上に俺は気分が高揚していて普段の思考とはすこし違っていた。

この時の俺には『話しかけない』なんていう選択肢がなかった。
ただ在ったのは、どういう言葉をかけようか？そのことだけで頭がいっぱいだった。

冷静に考えれば、これはナンパになるんだろうけど、冷静じゃない頭ではそこまで考えが回らなかった。

それに、普段なら、見ず知らずの人になんて話しかけたりしない。
無視するか、立ち去るかのどっちかの選択しか無い。

冷静じゃない俺は、気がついたら口を開いていた。

「こんばんは」

口から出た言葉は、普通に挨拶の言葉だった。
すると、彼女は当たり前のように口を開いた。

「こんばんは」

彼女も、ただの挨拶の言葉を口にする。

たった、5文字の短い言葉。

だけど、俺は話しかけることだけで頭がいっぱいで、返事が帰ってくるとは思っていなかった。

返事が返ってきた。それだけど、なんか嬉しくなってしまう。

「こんな夜中に、どうしてこんな場所へ来たの？」

続けて、彼女が口を開く。

「月が綺麗だったから……かな？」

思ったことをそのまま口にする。

それを聞いた彼女はくすくすと笑いながら口を開く。

「素敵な理由だね。今日のお月様はとても綺麗だし、夜中にわざわざこんな場所に来ちゃう気持ちも分かる気がする」

「そっいうあんたは、どうしてここに？」

俺も、彼女に同じことを問いかける。

「ん？私？私はね……嫌なことが逃げてきたの」
そついうと、彼女は街を見下ろした。

というよりは、ただ街がある方を見ているだけで、その目には何も映っていないような気がする。ただ、空ろにそちらを向いているって言う感じだ。

「逃げてきた……って嫌なことでもあったの？」

俺の言葉に反応して、こちらを向く。

その顔に映していたのは、先ほどまでの空ろな瞳じゃなくて少し困ったような苦笑이었다。

「初対面の君に言うべきことじゃない……かな？うん、じゃあ、さっきの逃げてきたって言うのは無し！私はこの夜景を見に来たのだって、綺麗でしょ？」

そう言われて、夜景に視線を移す。

ここに着いてからは、月と彼女しか見ていなくて夜景を全く見て居なかったから気がつかなかったけど、目の前にはとても綺麗な夜景が広がっていた。

「……ほんと、綺麗だ」

さっきと同じように、同じような言葉が自然と口からこぼれる。

「でしょ。ここ、私のお気に入りの場所なの。とても良い場所と思わない？」

「確かに。自分が住んでる街が、こんなに綺麗に見えるなんて思わなかったよ」

彼女は、街に視線を向けて言葉を続けた。

「普通に住んでると、こういうのって全然見えてこないよね。けど、ここから見える風景にはね、見えないものもいっぱいあるんだよ？」
彼女は、ベンチから立ち上がり柵のほうへと歩いていく。

柵にもたれながら、こちらへ振り向いた。

「たとえば、君。君は、この景色から抜け出てきたんだよね？だけど、私にはそれが見えなかった。街の中を歩いてきたって言うのに

ね。おかしい話だと思わない？景色の中のピースが一つ抜けてこんな場所に居るのに、景色を見てる人が気がつかないなんて」

「言われてみれば不思議だな。景色の一部だったのに、それが動いてることに気付かないなんて……」って、そりやそうだろ？思わず納得しかけたけど、見えてる縮尺が違っただから、俺みたいな人間が一人がすこし移動したところで、景色が変わるわけ無いじゃん。建物が動いたなら、分かるだろうけど」

「あははは、君は夢が無いなあ。ほら、そんなおもしろくもなんとも無い現実なんて置いておいてさ、もっと楽しく考えてみようよ。例えば、君はこの綺麗な夜景の1ピース。それが抜け落ちちゃったんだから、君を連れ戻さなくちゃいけないとか。そしたら、君は立派な逃走者。君は追っ手から逃げてここに来た！みたいな物語があったりとかさ。そんなのだったらおもしろくない？」

「おもしろくない？って言われてもなあ……。そういわれても、事実、追っ手なんか居ないし、まして、逃げてきたわけでもないんだけど。まあ、あんたの言うとおりに、もし、俺が追っ手に追われてたんなら、こんな所でのんびり月を見上げたり、街を見下ろしたり、そして、あんたと話をしたりとかしてないぞ？」

「だから、例え話だよ。もし、そうだったら面白いなって、ちょっと想像してみただけ」

そついうと、彼女はにこりと笑った。

確かに、彼女の言うとおりに俺が追っ手に追われた逃亡者だったなら、今の退屈な生活もうらやましく思ったりするんだろうか？

だけど、今の俺は、その退屈な毎日が、なにも変わっていかない毎日が嫌で仕方が無い。

だって、そうだろ？刺激の無い日々なんて、おもしろくもなんとも無い。

ただ、毎日が過ぎていくだけなんてさ。退屈だと思わないか？生きてるっていう実感がない。ただ、生かされてるだけ。

そんな生活がもう嫌で嫌で仕方が無いって思ってる。

「もし、そんな風になつたらそれはそれで楽しそうだと思うな」
だから、俺は、目の前の彼女が言った例え話がすこしおもしろく感じた。

というよりも、そういう風に考えれる彼女がうらやましく感じる。
「でしょ？ だけど、追っかけられるのってすんごく疲れると思うよ？」

「別に、追っかけられたいって言う意味で言ったんじゃないよ。ただ、そういう風に変化のある毎日はさぞ楽しいんだろってね」

彼女は、すこしだけ瞳の色を変えた。

さっきまでのキラキラとした楽しそうな色じゃなくて、もっと別の色に。

だけど、俺にはそのが何を表しているのかが分からなかった。

そして、すこしだけ何かを考えた後、ちよつと遠慮をしながら口を恐る恐る開いた。

「君は、今の生活に不満なの？」

ズドンと、胸に矢が刺さった気分になる。

今の言葉だけで、俺が退屈を感じてるって分かったみたいだ。

誰かに俺が退屈してるって気がついてほしいって言う気持ちもあった。

そして、気がついたならその『退屈』どうにかして欲しいって思ってた。

だから、俺が知らず知らずのうちに彼女なら、気付いてくれるかもしれないと思って、そういうのを匂わすことを言ってしまったのかもしれない。

まだ、会って1時間すら経ってない、ほんの少し話しただけの相手にそう思ってしまったのなら、自分でもおかしいと思うけど。
それに、『毎日が退屈で仕方が無いです』なんて、言ってもどうしようもないことは分かってる。

けど、さっきの彼女の発言を聞いて、もしかしたら彼女なら俺の生活を楽しく出来るかもしれないなんて思ったのかもしれない。

彼女と会ったのは今日が初めてだし、次に会うことなんて無いかもしれないのに、俺は彼女に期待してしまってるんだろうか。

次があっても無くても、今は関係ない。

ただ、思ったことを、感じたことを伝えたいって思った。

「物凄く退屈だ」

これを聞いても、どうしようもないのにどうしても言いたかった。たぶん、困るか、ただの肯定の返事が帰って来るんだろうけども、彼女はこういう答えを返してくれるのか、もしかしたらこっちが考えてるのは違う答えが返ってくるのかもしれない。

そんなことで、胸をワクワクさせながら俺は答えを待った。

「そう、君は退屈してるんだ。けど、退屈なら自分でおもしろいことをすればいいんじゃないの？」

だけど彼女は、俺の予想の斜め上に行く解答をくれた。

「待つてるだけじゃ、なんにも起こらないよ？待つんじゃないよ、自分で何かしなくちゃ何も変わらない」

そこで、彼女は一つ、大きく深呼吸をして、口を開いた。

「私もね。『嫌なこと』から逃げてるって。でも、それは逃げてるだけじゃない。この行動は、『嫌なこと』へ対抗手段だから。私は、これでも戦ってるの。『嫌なこと』を受け入れてしまえばとても簡単だよ。私が我慢するだけでいいんだから、でもそれじゃ嫌だから行動を起こしてそれに対抗するんだよ。自分で何かやらなくちゃ変わらないし、『嫌なこと』に負けることになっちゃうし」

それは、自分に言い聞かせるかのように、俺に言い聞かせるかのように、とても静かに、でも、力強く、澄んだ声で何の迷いもなく俺の鼓膜を振るわせた。

彼女の瞳は、とても力強く、その言葉に、色々な思いを乗せているようにも見えた。

「自分で行動を起こす……か。今までしたこと無かった」

「やっぱりね、自分から変わらないと何も変わらない。それに、君は私が言わなくてもそのことは気がついてたはずだよ？」

彼女は、俺の瞳をまっすぐを見つめたままそう言った。

「どうだろ？俺はそんなの思いもしなかったけど」

「分かってないなあ。君が今ここに居ることがその証明だよ。お月様が綺麗だからここまで来たんでしょ？それって、そうしようと思つてしたことでしょ？ほら、自分で行動してるじゃん」

「……確かに言われてみれば、そう取れなくも無いね」

「うわー、なんか素直じゃないね。なんか君、ひねくれてる。あと、君から私に話しかけたでしょ？それってさ、変化が欲しかったからじゃないの？お互いがお互いに独り言を言っただけで、あの言葉だけじゃ会話になってなかった。だけど、君は会話をしてきたでしょ？」

俺の心の真を的確についてくる彼女の言葉に、俺は口を開けなかった。

なんというか、自分でも分かってない自分を分かれてしまっているっていう事態が、まずありえないと思う。

「確かに、変化が欲しいと思ってる。けど、あんたに話しかけたのがその思いが出たからなんて俺には思えないよ。それに、話しかけたのはほんの気まぐれ、今日ここへ来たのとおんなじだ。そこにそんな意味があるなんて思えない」

「なんと言つか、頑固でひねくれものだね。ちなみに言っておくけど、私の言ってる言葉に深い意味なんてないよ。ただ、思った事を言ってるだけ。それに、君がこうであつたら良いなと思ってたから言ってるの。言っただでしょ？当たり前な日常なんてつまらない。だから、私はおもしろくなるように考えるってね」

そういうと、彼女はさっき座っていたベンチに座りなおした。

「君がね。私と同じことを考えていたら面白くなって、思っちゃったのよ。私は、どうしようもない毎日が退屈で、窮屈で苦しいの。そこから逃げ出したい、新しい変化が欲しい。だから、私は自分から動くことにしてるの。学校でもそう。家でもそう」

「もし、俺が同じことを考えてたらどうするんだ？」

純粹に感じた疑問。

ただ、どうしたいのか聞きたい。そんな想いが胸をよぎった。

「そうね。とりあえず、友達になる……かな？ううん、違うな。友達じゃなくて、仲間になりたい……かな？何かしたいなんて全然考えてないけど、同じことを感じてる人がいるんだって安心したいって思ってるかも……」

「そっか、安心……ね。正直に言うと、さっきあんたが言ってたこと、俺は何も考えてないって思ってたのに、もしかしたら、気まぐれの行動に意味があるかも……なんて思ったらすごくおもしろいかも」

俺の言葉を聞いた彼女は微笑んでいた。

「まあね、私が、そうであれば面白いって思ってることだから」

「あのさ、あんたの」

名前はなんていうんだ？そう言おうとした、俺の言葉は途切れた。途切れたって言うより、彼女が俺の言葉に言葉を重ねてきたんだ。「『あんた』じゃないよ。なんか、そんな他人行儀な呼び方は嫌だな。そうだねえ、私のことは『キサラ』って呼んでくれるかな？」

「キサラ……ね。それって、本名？」

「本名か、本名じゃないかなんて、関係ないでしょ？『キサラ』それが、君が私を呼ぶ名前。それでいいじゃん。私は、君のこと『ツキミ』って呼ぶし」

「ちよつと待て、どうしてそんなヘンテコな名前なんだよ！」

「だって、月を見に来たんでしょ？だから、そこからとって『ツキミ』。君は、今日始めて自分の足で歩いた。君の物語は、今日ここから始まるんだ。そんな、記念すべき日に私は誕生日プレゼントと

して『名前』をプレゼントするの。なんだから、素敵じゃない？」

そう言って、満面の笑みを浮かべる『キサラ』なんだか眩しくて、うらやましく感じた。

そして、今日生まれたなんて意味不明な言葉だったけど、それはストンと心の奥に落ちていった。

まるで、それが当り前のように。

背後から、ゴーンと鐘の音が響いた。

「あれ？もう12時か。そろそろ帰らないと、ほんとうに怒られちゃう。それじゃあね、ツキミ。」

そういうと、こちらに振り返ることも無く、キサラは出口へと向かって行って、夜の闇に消えていった。

残った俺は、街を見下ろしながら、買って来たコーヒーを飲んだ。30分にも満たない時間だった。

だけど、不思議と昔からの仲が良かったかのような、不思議な感じが。

お互いが、似たもの同士だっていうおかしな連帯感だけだったけど、それでも、俺のこれからの行動を帰るのには充分すぎるくらいの出来事だった。

「自分から行動を起こせ……ね」

ぐいっつと残りのコーヒーを飲み干す。

言っつの簡単だ。

だけど、実際に行動を起こすとなると、それは多分難しいことなんだと思う。

けど、今は、それさえもやってしまえそうな気になってくる。

次に、キサラにあったときは、もっと楽しい話をしよう。

次に逢える保証なんて無いのに、俺はそんなことを考えていた。

これが、俺とキサラのファーストコンタクト。

どうしようもないくらい、夢見がちで楽しいことを追い求めるキ

サウと、どうしようもないくらい、変化に焦がれてた俺の物語。

ちゅんちゅんと、小鳥のさえずりが聞こえる。

風にゆられてざわめく木々の音がとても心地良くて、目を閉じるとすっかり眠ってしまいそうなほど気持ちが良い。

だけど、次に耳に入ってきたのはそんな平和な音ではなかった。バシィー！！

それはそれは大きな音で、10人居たら8人は振り向いてしまいそうなほどの大きな音だ。

野球のホームランを打った時のような爽快な音が鳴り響く。

全く、こんな朝っぱらから過激だな。

そんなことを思いながら俺は……俺は何してんだ？

そう思ったところで、意識が覚醒する

そして、激しい痛みが後頭部から発せられている。

「どうしてあんたは、歩きながら寝るって言うおかしいことが出来るかなあ？」

涙目になりながら、声がしたほうを振り向く。

そこには、幼稚園からの幼馴染の佐奈が居た。

「ほら、これで起きたでしょ？寝ながら歩いていたら危ないから、優しい私が起こしてあげたんだよ。感謝しなさいよね」

そうか、こいつがこの痛みの原因か。

「わざわざ殴る必要ないだろ！朝っぱらから、気分最悪だわ！」

「うわーうつざ。せつかく人が親切心でやってあげたことに文句言うなんてさ。感謝はされても怒鳴られることはしてないつもりなんだけど。あ、あれか？ありがた迷惑とか言っちゃうゆとりなの？」

物凄く鬱陶しそうに呟く佐奈。

「絶対親切心からじゃない！ただ、殴りたかっただけだろ?!」

「あら、やだ！わかつちゃう？まあ、小さい頃からの付き合いだしね」

そう言つて舌を出して笑う佐奈だ。

小さい頃からの付き合いだけど、笑う時の佐奈は幼馴染みの俺から見ても可愛いと思う。

そして、俺はこの顔をされるとなんだかどうでも良くなつてしまつたりする。

別に、惚れた弱みだとか、こいつのことが好きだとか、そんなものじゃないんだけど、なんだか妹を見ている氣になつてくるから。

「あゝ、さつき殴られたせいで記憶がなくなつてしまつた。ここは何処？私は誰？」

「ここは通学路で通る並木道。そんで、あんたは白鷺秋彦^{しらぎあきひこ}。つていうか、なにやつてんの？棒読み出し、おもしろくないし。ほんとに頭やつちやつたとか？もしそうならごめんね。残念な頭がさらに残念になるなんて……つて、元々残念なら別にいいか？」

そう言つて、あはははつと一人で笑い出す。

「めちやくちや失礼な事言つてるし。冗談に決まつてるだろ？それに、佐奈より成績はいい方だ」

「あんたは、勉強だけはなんだか知らないけど出来るもんね。ほんと、腹立たい。私はがんばってもテストで点数取れないのに。あ、今度のテストの時も勉強教えてね。よろしく！」

「いやいや、『がんばっても』とか言うけど、全然がんばつて無いじゃん。勉強教えてもすぐ寝るし、マンガ読み出し、氣がついたら居ないし」

「そりゃあ、あんたの教え方がへたくそなのが悪い！」

「佐奈のやる氣の問題だ！」

そんな理不尽なことを言われたら、相手する氣が起きない。

こいつは俺の言うことに全然耳を貸さない。

こつちとしては、佐奈の成績はちよつとまずいような氣がするから教えてやつてんのに。

佐奈としゃべりながら、歩いていたら並木道を抜けていた。

学校までの距離は後半分くらい。

自転車通学が出来たら、もっと早く着くのに……っていうよりも、もっと長く寝れるのに。

「そういえば、あんた昨日寝るの遅かったでしょ？2時過ぎまで電気ついてたの見たよ？」

佐奈の家は俺んちの向かいに在って、俺の部屋から佐奈の部屋が見える位置にある。

つまり、佐奈の部屋からも俺の部屋は見えるんだ。

「まあね、いろいろあるんだよ」

「ふうん、思春期男子の夜の秘密って？うわーいやらしい」

そう言って俺から離れていく。

「ちよつと待てよ！佐奈が思ってるような事はしてないってば！」

「あたしが思うようなことってなあに？」

いたずらに満ちた顔で尋ねてくる。

こいつ、分かってて言ってるだろ？

「男の子の秘密って奴だ！」

「うわあー言っちゃったよ。ドン引きだよ……」

「お前が言わせたんだろ！？っていうか、してないって言ってるだろ？！」

ニヤリ

確かにそんな笑い方を佐奈はしていた。

「じゃあ、何やってたの？」

何か確信があるんじゃないかって言うくらい、佐奈の瞳には自信があふれていた。

別に、後ろめたいことはやってない……ことは無いが、夜中にこっそり外に出てたんだから。

けど、俺が何かやったからといって佐奈にわざわざ断りを入れる道理なんてものも無いんだ。

だから

「それは秘密」

「何それ！全然おもしろくない！隠されると余計に気になるってばく、ねえ。おしえてよ」

そう言っしてしつこく聞かれるけど、俺は昨日の出来事を話すつもりは無い。

だって、あれは俺だけの秘密なんだから。

家族にばれないように、こっそりと散歩に出て……そして、キサラに出会った。

キサラは、俺の起こした行動が、俺の物語の始まりだって言っしてた。

その言葉は、嬉しいような、意味不明なような、意味が分かっていなくてもなんとなく体が、心が、感じ取っしてしまう不思議。

そんな不思議な感覚だ。

言葉に出来ないけど、そのとき感じたことは、俺だけの……いや、俺とキサラだけの秘密にしておきたいと思った。

理由なんてないけど。

だから、昨日のことは誰にも話してないし、これからも誰にも話さないと思う。

「いゝやゝだ。俺にだってプライバシーっって言うものがあるんだよ」

「いつか、かならず聞き出してやるんだから！」

「はいはい、じゃあがんばってくれ」

「うわゝ、なんかかなり適当じゃん。おもしろくない！」

おもしろくないって、隣で暴れだす佐奈。

俺は、それを無視して歩き続ける。

これも、いつもの光景だ。

毎日毎日繰り返す日常。

楽しいと感じるし、つまらないとも感じる。

なにより、退屈だ。

それから、俺たちはくだらないことを言い合いながら学校に着いた。

ちなみに、佐奈と俺は同じクラスだ。
いつものように教室のドアを開けた。

「おはよ」

「おはよー！」

「おはー！秋彦はいつもどおりテンション低いな。嫁と登校してんだからもっと楽しそうにしろよ！」

「嫁じゃない！」

俺と佐奈は同時にツツコミを入れた。

「あはは、いつもどおりタイミング同じじゃん！お前ら仲良いよな！平久保さんみたいな彼女が欲しい！！秋彦と付き合っていないなら俺と付き合わない？」

「あいにく、私は北原くん見たいな軽いのはお断り。もっと頼りがいのある人がいいし」

ばっさりと、北原を切り捨てる佐奈。

ちなみに、平久保っていうのは佐奈の苗字だ。

北原はちくしょー！！と叫びながら教室を出て行ってしまった。
全力疾走で。

毎日毎日飽きないよな、あいつ。

そろそろ予鈴だから、さっさと戻ってこないと怒られるのに。

毎日毎日佐奈に、あんな感じで告白っぽいことしてるから、ほんとに佐奈の事が好きだったりしてって、勘ぐってみたり。

まあ、実際どうだかわかんないけど、そう考えるのは案外おもしろかったりする。

「ほんと、北原君飽きないよね？毎日のようにあんな事言ってきてさ」

佐奈がそう言った時に、ちょうど予鈴が鳴った。

「じゃ、また後で」

そう言つと、佐奈は自分の席へと向かって歩き出した。

俺も、それにならって自分の席へと向かう。

ただ、その途中にあるクラスメイトのほうへ視線を移す。

視線の先には、今井沙希が居る。

そして今井の視線は、さっき北原が飛び出して行ったドアの方を向いている。

朝、佐奈と俺、そして北原の3人でしゃべっていたらたまに感じる視線。

それが、今井からの視線だったっていうのを知ったのは極最近のことだ。

そして、今井の視線の先にはいつも北原がいる。

これが意味することは……って、そんなの考えるまでも無いけど。まあ、これに北原が気がついているかどうかは、ものすごく疑問なんだけれども。

これだけ、熱い視線を受けたら嫌でも気がつきそうなものなんだけどなあ。

さて、そんな自分には関係ないことは置いておいて、今日一日が
んばりますかね。

委員長の通信簿 2

1 時限目の授業は、国語。

わざわざ自分の国の言葉を勉強する必要も無いとは思っただけど、小学校も中学校もずっとこの授業がある。

というか、漢字の読み書きとかさえ出来たら生きていくのに特に問題は無いと思うんだけど。

古文とか絶対にこれから使う機会なんて無いだろうし。

そんな退屈な授業を右から左へと受け流しつつ、俺は特に意味も無いことを考えて時間をつぶしていた。

まあ、退屈な授業なら良くやることだけど、意味もなくノートに落書きをしてみたりとか、意味不明な空想にふけてみたりとか、あるいは脳内で物語を構築してみたりと。

脳内で物語の構築か……昨日、キサラがそんなことを言っていた気がする。

会話していた時間はとても短いし、話した内容も大したものじゃない。

だけど、キサラと話をしている時、ものすごく楽しいと感じていた。

それに、印象に残っていた単語に『物語を想像する』っていうのがあったような気がする。

みんな、退屈なときにすることは大体同じなんだって、ちょっと可笑しくなつてすこし頬が緩んだ気がした。

さて、とりあえずキサラのことは置いておいて、今回俺が考えていたこと。

それは、魔法について。

もし、魔法があったなら俺はこんなにも退屈をしなかったかどうかって言う、ものすごくどうでも良いことで、実際には無いんだからものすごく不毛なことだ。だけど、ただの時間つぶしだから考え

ること自体に意味を求める必要も無いし、意味が在ってもなくてもどうでも良い。この退屈な授業が終わるまでの暇つぶしだから。

もしも俺が魔法を使えたなら何をするんだろう。

いったいどんな魔法が使えるんだろう？世界を変えてしまえるような、ものすごい魔法とか使えたりするんだろうか？

もしもそんな魔法が使えるのなら、俺の日常はもっと違うものになっっていたりするんだろうか？

世界を左右する戦いに巻き込まれたりとか、どこかの権力者が俺の力を求めて争ったりとか……

なんだか、全然楽しそうに思えないな。

退屈はしなさそうだけど、楽しくなかったら意味が無い。おもしろくなかったら意味が無いと思う。

それは退屈よりも酷い、ただの苦痛でしかない。

だから、魔法とかそんなものがあるのも面白いかもしれないけど、世界を左右する戦いに巻き込まれたくなんかないから、ほんのちょっとだけの力でいいと思う。

というよりも、『楽しくなる魔法』っていうのが一つだけ在ったらしいと思う。

『楽しくなる魔法』っていうのがあんなら、俺の毎日は楽しいこととでいっぱいになると思うから。

今俺は草原の真ん中に立っている。

周りには、これまで一緒に旅してきた仲間たちが立っている。

魔法使いに、戦士、盗賊と職種様々な仲間たちが微笑みながらこれからのことについて語りかけてくる。

『魔王をどうやって倒そうか？』

『あいつは、強いからまずは装備を整えてから』

『なら、俺のスキルで村人から巻き上げればすぐに金は作ることが出来る!!』

『お！それ名案だ!!』

『よし！じゃあ早速金持ちが居そうな村へと旅立つか!』

『賛成!』

行き先が決まったところで、村がある方向へと足を動かしたときだった。

草原をなでる風に乗って、声が聞こえた気がした。俺は歩き出すとした足を止めるのだった。

「……る。も……る……だぞ」

何を言ってるかわからない。

だけど、それはとても弱弱しくてとても小さい。

多分妖精たちが俺たちのことを応援してくれてるんだろう。

『おい！早く行くぞ!』

仲間たちが足を止めて俺を待っていてくれた。

『おう！今行く!』

そう、先に駆けていった仲間たちを追って俺も走り出した。

「起きろ!!」

耳元でいきなり叫ばれた。

耳から脳みそまで、ものすごい衝撃が響き渡ってきた。

さっきまで見ていた夢さえも、どこか遠くまで吹き飛ばしてしまふような衝撃。たぶん、とても面白い夢を見ていたはずなのに全然思い出せない。

覚醒しきっていない頭で辺りを見渡してみると、机をくつつけたりお弁当を出したり、さらには購買で買ってきたと思われるパンを明けようとしていたり。そこにはまるで、昼休みであるかのような光景が広がっていた。

そして、俺の耳元で大声を出したのはほかでもない佐奈だ。その

隣にはちゃっかり北原が立っていたりする。

あくびをしながら背中を伸ばす。すると、バキバキととても嫌な音がした。

どうやら、机に突っ伏した状態で固まってしまっていたみたいだ。まだ重たいまぶたをこすりながら佐奈に尋ねた。

「まだ1時限目の休み時間なのに、みんなどうしてご飯を食べようとしてるんだ？もしかして、早弁が流行ってきたとか？」

「何言ってるの？今はもうお昼休みだよ。っていうか、あんた1時限目の途中から今までずっと寝てて、たまに意味不明な寝言を呟ってたよ」

は？今はもう昼休みだって？そう言われて時計に目をやった。現在の時刻は12時45分。

昼休みが開始されて10分が経過したところ。……寝言で恥ずかしいことを言っていないかもものすごく不安だ。

「休み時間のたんびに起こそうとしても全然起きないから、現実世界から逃げ出そうとしているのかと思ったぞ？」

購買で買ってきたであろうパンの袋を机に置きながら北原そう言うってきた。つまり、俺は午前中の授業全てを寝て過ごしたことになる。

「マジで？」

「うん、マジで。それよりさ、さっさとご飯食べましようよ。私お腹空いちゃった」

そう言いながら、佐奈が隣の机を俺の机にくっつけてくる。

北原もパンの袋を開けながら昼ご飯を食べる準備をしていた。それにならって、俺もカバンから弁当を……弁当を取り出そうとするんだけど

「……弁当が無い」

「何言ってるの？今日はおばちゃんが作らないって言ってたでしょ？だから、はい」

そういつて佐奈は俺に弁当を渡してきた。

「あ、そうか。今日は佐奈に作ってもらったわけ？」

「そうだよ。だから、私に感謝しなさい。早起きして作ったんだから」

「なあにい！！平久保さんの手作り弁当だと！！お前ズルイ！！」自分のパンにかぶりついてた北原が、いきなり大声を出して叫びだした。周りのクラスメートたちの視線がこっちに集中するから、そういうのマジでやめて欲しいんだけど。

だけど、周りの男友達からも北原と同じく

「なに！？平久保さんの手作りだと！！」

「白鷺め！許すまじ！」

だとか、そんな不吉な言葉がちらほらと聞こえてくる。

「……うるさい」

男子生徒の喧騒を打ち消したのは、佐奈の一言だ。その一言で、俺への非難が一蹴された。

そして、佐奈は続けて口を開く。

「やっぱり、食事のときは騒いじゃだめだね」

「……そうですよね」「……」

男子生徒（北原を含む）の合唱。佐奈の一言にこれだけの力があるなんて……たまに恐怖を覚えることがある。

佐奈の一言で動かされる男子生徒って……まあ、ファンクラブがあるって言う噂もあるし人気があるのは知ってるけど。

男子生徒にここまで好かれていたら、女子からは冷たい目で見られがちだけど佐奈はそんなことは無い。竹を割ったようなカラツとした性格と抜群の容姿が相まって、男子と女子からの絶大な人気を持っているんだ。そんなやつが幼馴染だっていうのが俺の隠れた自慢だ。

ちなみに、佐奈に弁当を作ってもらったときは、いつものこんな感じだ。

箸を取り出して、弁当に手をつけ始めたところで北原が口を開いた。

「なあ、お前今日はどうしたんだ？いつもは『授業くらい真面目に受けるよ』なんて言ってくるくせに。お前が寝てること自体珍しいのに、それも午前中全部寝てるとかさ。昨日何かやってたのか？」

「秋彦は昨日は2時ごろまで起きてたんだよ。いつもなら12時過ぎには寝てるのに。でね、そのことを朝登校中に聞いたりしたんだけど全然教えてくれなくて……。あ、そうそう！朝っぱらから秋彦が私にセクハラ発言してきたんだよ！どう思う？」

「うん、サイテーだ！これだからリア充は！！だから、その弁当のコロッケを一つ俺に献上しろ。そして、平久保さんに謝れ」

「ヤダね。そういうネタを振ってきたのは佐奈が先だ」

「あれ？そうだっけ？忘れちゃった」

そう言って笑う佐奈。まったく、こいつは……佐奈の一言で俺はピンチになりかねないのにその自覚が無いんだ。まあ、いつものことなんだけど。

そう思いながら俺は箸を進める。というか、そんな言いがかりで何で弁当のおかずを北原にやらないといけないんだ。おかしいだろ。「ずう」と気になっていたんだが、どうして白鷺と平久保さんっていつも一緒に弁当食ってんの？」

「ん？」

ご飯を一口、口に含んだところで北原が話しかけてきた。佐奈も同じようにおかずを口に含んだところだったみたいで、同じような格好をしている。

「うわ、なんかこの二人息がぴったりだよ！なんだか、リア充の匂いがするよ！とても腹立たしいよ！」

「別に、リア充じゃないし。たまたまタイミングが合ったただけだし。言われも無い苛立ちを向けられる筋合いも無い」

「そうそう、私たちが一緒にご飯を食べるのは一種のクセのようなものだし。それに、私も秋彦とばかりご飯を食べてるわけじゃないよ？たまたま女の子の友達とも食べてるし」

「たまたま女子と食べて、ほとんど白鷺と食べてるってことじゃん！」

「まあ、そうね。さつきも言ったけどクセだよ。今までずう〜と一緒にだしね」

「なに！？白鷺と平久保さんってずっと一緒なのか！？墓の中まで！？」

「「そこまで言ってない」」

「いちいちリアクションが大きい奴だ。っていうか、墓の中までって言うのは飛躍しすぎ。」

「また息がぴったりだ！おじさん軽く感動したよ！そして、感動とは別の意味で涙を流しそうだ！……悔しくて」

「うざ」

ちなみに、うざって言ったのは俺じゃない。佐奈だ。

佐奈の一言に北原は石造のように固まってしまっている。あ、言い忘れていたけど佐奈は口が結構悪い。そして、頭も悪い。本人は努力を怠っているから悪いだけでがんばれば頭はいいって言うてるけど、成績が良いトコなんて見たことないから、そんな言葉は信用できない。

「なにか私の悪口言った？」

熊も射殺せそうな視線を俺に向けながら尋ねてくる。どうして、心の中で思ったことが分かったんだ？

「いや、何にも。っていうか、俺はさつきからしゃべってないし」

「確かに。けど、なにかイラッと来たからもしかしたら変なことでも考えたのかと思ったわ」

危ない。こいつ頭は悪いけど、勘だけは昔からすんげえ良いんだ。今度から気をつけよう。

納得がいかないって顔をしているけど、佐奈は食事の続きを始めた。

「で、話を戻すけどどうしてずっと一緒なんだ？」

「いつの間にやら復活した北原が尋ねてくる。」

「ん？言っただけだったか？俺たち幼馴染なんだ」

「初耳だよ！！何それ！ギャルゲーの主人公か！？」

「なに言っただおまえ。気でも狂ったのか？それともリアルとゲームの区別がつかなくなったのか？かわいそうに」

「いやいや！俺は正気だよ！」

「あのさ、うるさいんだけど」

北原の心に5000のダメージ。北原は再び石像になった。

「はい、ごちそうさま。私、弓道部のミーティングあるから行くね」
佐奈は、弁当箱を片付けるとさっさと教室から出て行ってしまった。

「なあ、平久保さんって俺に冷たくないか？」

「あいつはだいたいあんな感じだから俺は全然気にならないけど？」
北原大きな溜息をすると、しゃべりだした。

「お前は良いよな。あんな可愛い幼馴染が居て。しかも弁当まで作ってくれてさ。俺も、そんな幼馴染が欲しいよ」

「そうは言うけど、あいつと居ると結構疲れるぞ？無理難題を吹っかけられたりとか、宿題教える！とか」

「いやいや、俺にはうらやましいようにしか思えないぞ！無理難題はおいといて、宿題を教えるってことは部屋で二人つきりじゃん！」

「そんな良いもんでもないってば。あいつすぐ寝るし、真面目に勉強しないし、ゲームし始めるし。教えてるこっちの身にもなってるよ」

「いやいやいやいや、若い男女が一つの部屋で二人つきりなら、それはそれは大人の世界が広がってるんじゃないのか！？」

「馬鹿か？ちっちゃい頃からずっと一緒だった奴と今更二人つきりだからって、何にも思わないぞ？」

「ありえない！ゲームの中じゃ、そんなことが起こったら間違いないくえっちな」

「まで！それ以上言うな！！俺までお前と同じ眼で見られる！」

「うわ、なんかものすごく酷いことをいわれた気がする！」

「気のせいだ。だから、さっさとパン食っちゃえよ。俺眠いから寝たいんだけど」

「つまり、俺が邪魔だつて言いたいのか？」

「まあ、はつきり言ってしまうえばそんな感じ。まあ、そこまで邪魔だとは思ってないから食うまで待つてやるよ」

俺の言葉は、最後まで北原に伝えられることは無かった。なぜなら、『そんな感じ』まで言っただけで「ちくしょー！！！！！！」って叫びながら教室からものすごい勢いで出て行ってしまったから。マジで騒がしい奴だ。

というか、さっきからチラチラと今井がこっちを見てきたのあいっ気がついてたのか？

とくに、幼馴染がどうか言ってるときものすごくこっちを気にしていたぞ？

北原に気があるんだろうけど、北原が全然気付いてないなんて……ちよつと可哀相だ。

俺が伝えてもいいんだけど、勘違いだったら格好悪いし見とくしかないんだけど。

弁当箱を片して、机に突っ伏す。

弁当を食ってる時から、ちらちらとこちらの様子を伺っていた睡魔が、チャンスが来たとばかりに襲ってきた。

5時限目の授業が始まるまでには起きようなんて考えながら、俺はすぐに深い眠りについていた。

委員長の通信簿 3

「失礼しました」

そう言いながら職員室の扉を閉めた。

窓の外を見てみると、グラウンドは夕日で赤く染まっていた。

野球部やサッカー部がドロドロな格好で、道具を片付けている。

時計を見てみると、短い針と長い針が立て一直線に並んでいた。つまり、午後6時ジャスト。いつもならバイト先でのんびりと本を読んでいる時間帯だ。

今日は、バイトが休みで特にやることが無かったからいいけど。

終礼が終わって、さあ帰ろうとしたら担任の先生に呼び止められ、そのまま職員室。

そこで待ち受けていたのは、午前中の授業を受け持っている先生たち4人。予想通り、午前中寝て過ごしたことに對する説教が俺を待っていた。

『高校生としての自覚が足りない』とか、『これだからゆとり世代は』とか、『たるんでるぞ！』だとか、『成績がいいからって調子に乗るな』だとか、言いたい放題言われた後、反省用の課題が大量に出され、それが終わるまで帰られないって言う地獄を味わったところだ。

テストの予習と思えばなんともないけど、2時間半くらいぶっ続けで課題をやっていたからかなり疲れた。

重たい足を引き釣りながら、教室へ向かう。

いつもは、いろんな喋り声が聞こえてきて賑やかな廊下も、今は誰も居ない。

部活動をやっている奴らも荷物は部室へ持って行ってるはずだから、教室に用事がある奴なんてまず居ない。よって、今の時間、廊下に居る人間なんて居残りさせられた俺みたいな奴か、見回りの先生くらいだ。

このまま学校に居てもやる事が無いし、さっさと帰ろう。そう
思うと、俺は歩く足を速めて教室へ向かった。

教室の扉を開いた俺は固まっていた。

誰かの告白シーンを見てしまったわけでもないし、なにか魔術的
な儀式が行われていたわけでもない。

ただ、そこには予想していない人物が窓際の席に座っていた。

今井沙希

うちのクラスの委員長だ。

成績優秀で運動神経も良い。肩口で切りそろえられた髪や、赤い
メガネの向こうにあるやや釣り眼気味な瞳が印象的な美人さんだ。

ただ、結構口が悪い。

悪意に満ちた悪口ではなく、ただ言い方がきついただけなんだけど、
目の印象と言葉遣いで結構怖い印象を受けてしまう。

始めは俺も怖い人だと思っていたけど、慣れてしまえばどうって
ことなく、気さくで話しかけやすい良い人だ。完全に言葉遣いで損
をしまっているけど。

今井は扉を開ける音でこっちに気付いたようで、窓の向こうを見
ていた顔をこちらへ向けた。

「こんな時間まで学校に居るなんて、よっぽど学校が好きなんだね。
机で寝てしまったり学校が好きだなんて思わなかった。まあ、世
の中広いからそういう変な趣味をもってる変態さんも居るかもしれ
ないし、アタシは気にしないよ」

「別に学校が好きでこんな時間まで居るわけじゃないし、そんな変
態でも無い！っていうか、今井こそどうしてこんな時間に学校に居
んの？」

俺の言葉を聞くと、今井はとてもしつらなそうに窓の外に視線を
移した。

なんというか、ものすごく憂鬱そうって言う言葉が似合う感じ。

「知らない男子から告白されてた。それはそれは熱くて暑い告白をしてくれたわけ」

「その割にはおもしろくなさそうだけど？」

「まあね。知らない奴だし、興味もないからソッコーで断ってあげただけど、しつこく食い下がられてものすごくうざかった。なんかさ『付き合ってる内に好きになるかもしれないから』とか言っちゃって、笑えて来るよね。こっちの気持ちなんて完璧無視で、自分の都合ばかり押し通そうとしてさ。拳句の果てに、逆切れして帰って行ったよ」

「それでも残念な奴だな。まあ、それだけ好きだったってことじゃないの？『絶対諦めたない！』みたいな？」

「あ、それも言われた。諦めたくなくても、諦めても結果は同じなのね」

そこで、今井は一つ大きな溜息をついた。そして、窓の外から俺のほうへと視線を移した。

「ねえ、どうして告白ってするのかね？」

「さあ？俺は告白とかしたことないからわかんない。けど、自分の思いを伝えたいからじゃないのか？」

「そっか。自分の思いを伝えたい……ね。けど、そんなことして失敗したらその思いも壊れちゃうじゃん。それだったら、やっぱり自分の中にとどめておけばいつまでも壊れずに済むとアタシは思うんだ」

そう話す今井の表情は、ある種の諦めの色が浮かんでいた。

告白して失敗するくらいなら、その思いを自分の中だけにとどめて相手には伝えないほうが良いって今井は言う。

「今井は誰かに伝えたい思いつてもんがあつたりするの？」

「さあね。もしあつたとしても、アタシは自分の中だけにとどめるけどね」

そう言って笑う今井。だけど、その笑顔はなんだか見ていてとて

も切なくなる、そんな笑顔だった。

どうして、そんな顔をして笑うのか俺にはわからない。さつき今井が言っていたことも、理解は出来るけど納得は出来ない。告白もしたことないけど、どういう気持ちで思いを伝えるかを想像することとは出来る。だから、思った事を今井に伝えようと思った。

「伝えたらもしかしたら、付き合えるかもしれないのに伝えなくて言うのはすこしもったいない気がするけどな」

「付き合えるかもしれない、だけど付き合えないかもしれない。むしろ、付き合えない可能性のほうが高い。それだったら、わざわざ危ない橋を渡る必要なんて無いんじゃないかな？」

「多分だけど、告白する奴って言うのは、付き合いたいから思いを伝えるんじゃないかって、今の関係じゃ嫌だから、何か変化が欲しくて告白するのかもしれないと思うんだ。まあ、今思いついたただけなんだけど」

「そういう考え方もあるね……うん。まあ、アタシには縁の無い話だけどね」

さつきから気になることが一つだけある。

これは、多分言う必要の無いことだけど、この際だ。一応聞いておこう。

「あのさ、さつきから気になってたんだけど」

「ん？なに？」

「そこ、北原の席だよな？」

そう口にした途端

教室内の空気が凍った。

こつちを見たまま固まっている今井。

俺もなんだか身動きが取れない。説教を食らっているときに身動きが取れないアレのような感覚だ。

別に、悪いことなんてしてないけど金縛りにあったみたいに口――

つ動かすことが出来ない。

そして、固まっている今井は見る見るうちに顔を真っ赤に染めていた。

林檎のように真っ赤になったところで、突然叫びだした。

「ま、間違えただけよ！別に、北原がどういう風景をここから見るとかそんなの全然考えてないし！たまたま腰を下ろした席が北原の席だっただけで、北原がどういうことを考えてるか少しは分かるかな？なんて思ってたここに座ったわけじゃない！ほんとにたまたまだし！自分の席と間違っただけだし！」

まくし立てるだけまくし立てると、息を切らしながらさらに言い訳を続けようとする今井が目の前にいた。

というか、どれだけ言い訳を並べようとしても言ってることがチグハグだし、なんに関しても北原の名前が出てくるし、わざとやってるんじゃないかってくらい動揺して事実を暴露し続けていた。

パニックって怖いね。

心の底からそう思った放課後の教室でした。

今井が落ち着いたのは約10分後、赤く染まっていた教室は夜の闇に追い立てられすこしだけ青く染められようとしている。

今俺は、今井と一緒に下校中だ。

女子と一緒に下校する。それも、幼馴染じゃなくて本当にただのクラスメートと一緒にだ！なんて高校生活を充実してるんだろう！…

…なんて浮かれることは出来なかった。

明らかに俺じゃなくて、北原に好意を向けているのにどうしてもしてはしゃぐことが出来ようか。いや、俺には無理だ。

だが、はしゃぐことは出来なくても気持ちちは結構浮かれていたりするもんだ。健全な高校2年、女子と一緒に下校するなんてかなりレアイベントだ！例えば自分に好意を向けられていなくても、充分に

楽しいイベントだったりするはず。

「はあ」

するはずなんだけど……今は全然気持ちが悪くない。

女子と下校……楽しいイベントはずなのに、肝心の女子が溜息ばかりついて会話が成り立たないからだ。

「ずっと溜息ついてるけど、俺は絶対に北原の席に座って北原のひと誰にも言わないってば」

「それは分かっているんだけど、なんというか、あんなところを見せてしまった自分が恥ずかしいというか、今日に限って居残りしていた白鷺が腹立たしいというか、むかつくというか」

「いやいや！俺は確かに先生に呼び出されて居残りしていたけども、今井にそのことで非難されるいわれが無い！」

「それも分かっているんだけどね。なんていうか、とりあえず八つ当たりしておかないと気がすまないって言うかね。まあ、そんな感じなのよ」

隣を歩く今井は、一言で言うとうんざりそのものだった。

ちなみに、どうして一緒に帰っているかと言うと、帰る方向が同じだからだ。

気まづくなるのが分かっているのに、一緒に帰りたがる奴なんて居ないだろ？

「ねえ、佐奈と白鷺って幼馴染なんだよね？」

こっちから話しかける以外はずっと溜息しか口から出さなかった今井から話題が振られた。

「そうだ。幼稚園の頃からずっと一緒だ。しかも、クラスもずっと一緒だし、所謂腐れ縁っていう奴だ」

「マジで？そんなずっと一緒なんだ。まあ、見てたら分かるけどかなり仲良いもんね。ズバリ、その仲の良さの秘訣は？」

「ん？秘訣？そうだな、言いたいことは溜め込まないでその場で言っただけのことかな？変なこと我慢して相手に合わせとか、そんなのおかしいし。まあ、佐奈の性格を考えたら絶対に思っ

たことがそのまま口に出てるだろうけど」

「ん〜。そっか、そっか。ありがと、あんまり役に立ちそうに無いけど、とりあえず覚えとくよ」

そう言いながら、こっちを向いて微笑む今井は結構可愛く見えた。だが、そつと毒を吐くその性格のせいかな、その笑顔を素直に受け取れない。全く、もったいないよなせつかく可愛いのに。

「今井も思ったこと溜め込まないですぐ言うタイプだろ？」

「そう思う？」

「おう、今まさにそう思った」

「じゃあ、そうなんじゃない？けど、佐奈みたいに本心駄々漏れなんてことは無いと思うけど。隠すことはちゃんと隠してるつもりだしね」

「北原のこととか？」

ピタッと今井の動きが止まる。ヤバイ、ちよつと地雷踏んだかも。

「……うん。北原……拓真に関しては全然素直になれない。どうしても、どうがんばっても素直になてなれなかった。だってさ、怖いじゃん。何にも思ってないって言われるのがさ」

悲しそうに笑う今井に掛ける言葉が見つからない。

俺にはわからないくらい、北原のことを考えてる。そんな片鱗を見た気がした。興味本位で口を出してはいけない領域。そんなのを見せ付けられた気がした。

どれだけの思いを今まで貯め続けてきたのかとか、どれだけ北原のことを思っているのかとか、色々なことが頭に浮かぶんだけど、どうやってもうまく言葉に出来ない。

「ごめんね。白鷺には関係ないことだった。それに、こんなの白鷺に言っても意味ないし。まあ、すこしだけ白鷺と佐奈の関係のことも参考にさせてもらうつもりだから、今日話したことは無駄じゃないと思うけどね。じゃあ、アタシここ左だから……バイバイ」

交差点を左に曲がって歩き出した今井を後ろから眺めることしか、俺には出来なかった。

今井が見えなくなるまで見送った後、俺も自分の家へ向かい歩き出した。

歩きながら考える。

いろんな想いが自分の中で渦巻いているのは分かるけど、それはどんな感情なのか、どんな思いなのか。

自分のことなのに分からない。今井の思ってることの一部を見て同情したのは確かだ。

だけど、それだけじゃない。どう表現したらいいか分からないけど、今井の力になりたいそう考えていた。

委員長の通信簿 4

カタカタとキーボードを叩く音が私の部屋に響く。

妹たちはリビングでテレビを見ているはず。

私は、こっそりとつけているブログの記事を書いていた。

昨日、面白い男の子に出会った。

いつも私が時間をつぶしている公園へコンビニの袋をぶら下げながらやってきた時は驚いた。

こんな時間にこんな場所へ来る人が他に居るなんて思っても見なかったから。

私が居たのは別名『空の庭』（地元の人がこれを読んだら場所が分かっちゃうかも）で、その男の子もこっちへやって来た。

空の庭にはベンチが二つあって、それぞれ4人くらいが座れるようになっているんだけど、私が座っているベンチとは違うほうへ腰をかけて、その男の子は月を見上げていた。

その横顔はちょっと幼さが抜けきってないのに、ちょっとだけ大人びていて、そのアンバランスさが現実味を削ぎ落としていた。

どこか、この空間に合わない。そう、どこかの世界から抜け出てきたみたいな印象だった。

そしてポツリとその男の子は呟いた。

「綺麗だ」

だって。

ちよつと笑っちゃったよ。

大真面目な顔してそんなこと呟くから。

だけど、私も彼にならって見上げてみると、そこにはまんまるで綺麗なお月様があったの。

私もうい言葉が出た。

それに気付いた彼が私に話しかけてきたっていうのが、昨日の面

白い出来事。

まあ、他愛も無い話をして、そのままバイバイ。

次また会おうなんていつてないのに、また会える気がした。そんな不思議な出逢いでした。

なんだか、少女漫画みたいだけどホントの話。

うまく言えないけど、私とその男の子って同じようなことを考えててちよつとおもしろかったからかな？

もしくは、同じようなことを考えてたからシンパシーみたいなもんがあったのかも。

今冷静になつて考えてみても不思議です。

まあ、そんなお話。

「ふう、更新完了つと」

ブログの更新が完了してふと一息ついていた。

記事を書きながら昨日のことを思い返してみても、やっぱり不思議な男の子だった。

年齢は多分、私より一つか二つ下くらい。

暗くてよく顔は見えなかったけど、そんなにいかつい感じではなかったと思う。

纏っている雰囲気はとても穏やかで、なんだか落ち着くような感じだった。

「お姉ちゃん！アイス食べる？」

リビングから大きな声が聞こえてきた。

「うん！食べる！」

そういうと、パソコンをスリープモードにして、扉に手をかけた。部屋を出る前に、ふと外の窓を見る。窓の向こうには『空の庭』が見えていた。人影は居なかったけど。

私の部屋から……っていうか、私の家の西側の窓からは公園の『空の庭』が丸見えなんだ。

もしかしたら、昨日の男の子が居るかもしれない……なんて思っ

てみたら、ちよつと気になっただけ。

まあ、居ても居なくても今日は公園へ行く予定なんてないから私には関係ないんだけど。

もし、もし、あの子が居たらちよつと面白いって思った。ただそれだけ。

もしかしたら、私は本当にまた会いたいって思ってるのかもしれないな。

30分も満たないほんのちよつとの時間しか話してないのに、なんだか昔から友達だったような気がしたんだ。

実際初対面だし、昔から友達なんて絶対に無いんだけどね。

なんだろう。うまく言葉に出来ないけど、ただの他人じゃない、そんな気がしたんだ。

今井沙希。

俺のクラスの委員長で、ちよつと口が悪くて目つきがきつい美人さんだ。

そして、北原が好きって言う物好きだ。

今日、今井と一緒に帰ったときに見たあの寂しそうな顔が忘れられなくて、俺はバイト先の本屋へと足を伸ばしていた。

バイトが無いのに、本屋へ向かうなんて別に珍しいことじゃないけど、買ったものがかなり特殊というか、なんというか、女性向けの雑誌だったから、店長から変な目で見られてしまった。

買ったのは『愛しの彼を落とす50の方法』なんてタイトルの本だ。

言ってしまえば恋愛指南書（女性用）だ。

それを男の俺が買ったから、おかしな目で見られるのは仕方が無いと思う。

そんな恥ずかしい思いをしてしまったけど、俺は今井を何とかし

てあげたかった。

あんな寂しそうで悲しそうな顔は誰のものであっても、見ていて気持ちのいいものじゃない。

ましては、同じクラスのクラスメートだ。さらにさらに、美人と来ている。

これは、助けるしかないじゃないか。まあ、今井がお熱を上げているのは、あのバカだけど。

「秋彦、お前もしかして男が好きなのか？」

透き通った綺麗なソプラノが聞こえてきたと思ったら、突然視界が店長の顔で埋め尽くされてしまった。

まさに至近距離。鼻と鼻がくっつくんじゃないかっていうくらい近い。これが、むさい男だったら顔面パンチものだけど、綺麗な女性だ。そんなパンチとか死んでも出来ない。

とにかく近すぎる顔を店長の方を押して遠ざける。

「違いますよ！クラスメイトの為に買っんです！」

「それはそれは、ご苦勞なことだね。だけどさ、人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ぬらしいよ？」

「いやいや！邪魔はしないですって！助けるだけだから！」

店長は切れ長の瞳をさらに細めた。

「ふゝん、まあいいけど。忠告しておくね、恋愛事に他人が介入して良い事なんて何にも無いと思うけどな。秋彦にも、その助けようとしている女の子にも」

「だけど、このまま放っておいても絶対進展しないと思うし、今井のあんな寂しい顔もうみたくないし」

「今井さんっていうんだ。その女の子。それでさ、秋彦はその今井さんが好きなの？」

店長の瞳が俺の目を射抜く。

蛇に睨まれたカエルのように、体が硬直して動けなくなる。

鋭い刃物を喉元に突きつけられているような威圧感を感じる。それほど店長の視線は真っ直ぐだった。

「別に、好きとかそんなんじゃないです」

「ならどうして？」

「それは……どうしてですかね？俺にも良く分からないです」

交差している視線の向こうで店長の瞳の色が変わる。『何か』を見抜かれた。そんな不思議な感覚になった。

「好きでもない女の子の寂しい顔を見たくないから？それってさ、どうということなの？私には良く分からないな」

そういうと、店長は俺から視線を外した。

喉元の刃物を取り除かれた俺は、やっと体が動くようになる。

店長は、そのまま店の奥へと足を進めていた。

その足を止めて、背中を向けたまま店長が話し始めた。

「どんな理由があるのか分からないけどさ、やるんなら徹底的にやりなさいよ。途中で投げ出すのなんて、絶対駄目だから。絶対に最後まで遣り通す。それがどんな結果になってもね。その覚悟が無いなら手を出すなんてやめときなよ。私が言いたいのはこれだけ。じゃ、気をつけて帰りなさい」

それだけ言うと、店長は店の奥へと姿を消した。

一人残された俺は、することも無いので店を後にした。

「秋彦。あんたもしかして男が好きになったのか？」

家に帰って、部屋で着替えていると姉貴が大きな声で俺の名前を呼んだ。

姉貴は何を言ってるんだ？頭の中にハテナマークが咲き乱れる。本屋で買ったあの本を見なければ、そんな発想は生まれないはず。それに、あの本はこの袋の中にちゃんと入れて部屋にもって入っているからみつかるはずは……

無い。

本が無い。

袋の中にあの本が無い！

そうだ！手を洗いに行くときにリビングに一度置いた。多分そのときに姉貴がとったに違いない。

「お姉ちゃん悲しいよ！そんな弟に育てた覚えは無いのに！」

さらに、姉貴から罵倒が飛んでくる。

とにかく、さっさと誤解を解かないとさらにめんどくさいことになる。

リビングに走って向かった。

「姉貴！その本は、俺の為に買ったわけじゃないからな！」

「何！？私のため買ったのか？」

リビングについた俺を待ち受けていたのは、恋愛指南書（女性向け）を片手に持った姉貴だった。

まあ、その本を取り返しに向かったのだから予想通りだ。

「それも違う！とにかく返してくれ！」

「嫌だ！先にお姉ちゃんが、秋彦が読んでも無害なものか検閲させてもらうから」

姉貴……眼が血走ってる。

そんな男にモテたいの？

「そんな男にモテたいの？」

「うぐ、弟にそんなこと言われるなんて思わなかった！そうだよ！モテたいよ！悪いか！？」

なんか逆切れされた？！

っていうか、心の中だけで言っただけなのに口に出ていたか。これからは気をつけないと。

「まあまあ、姉貴可愛いからモテるよ。だから、返してくれ」

「何その言い方。全然気持ちが悪くもってない！そんなんじゃない私のハ

ートには届かないよ？」

別に、ハートにとどかすつもりなんて無いしな！

勝手に勘違いして暴走しているだけだろ！

段々イライラしてきた。

「あのさ、そんなにこの本見たいの？」

「まあ、見たい……かな？」

明日、今井にこれを渡してこれからの対策を考えないといけないんだから、先に内容を把握しとくのは必要だし。

「じゃあさ、お姉ちゃんと一緒に見ようよ！そうしたら、秋彦もお姉ちゃんもみんな幸せ！ほら、いいでしょ？」

姉貴の性格を考えると、この要求を呑まないとあの本は返してもええそうに無いな。

一度言い出したら聞かないし。

「はいよ、わかった。わかったら、明日の朝には絶対に返してくれよ」

「きやつほーい！さすが秋彦！やさしい！そんなところがお姉ちゃんの自慢だよ！」

「俺は姉貴のウザイところが悩みの種だ！」

「はいはい、ツンデレツンデレ。じゃ、見よつか！」

姉貴は、俺の悪口は見事にスルーして本を広げ始めた。

こんなバカ全開の姉貴だけど、勉強は出来る。意外と偏差値がめちゃくちゃ高い進学校に通っていたりする。

年齢は一つ上だから、今高校3年生、そろそろ受験だつて言うのにこんなバカなことばかりしている。

学校では、優等生で通っているらしいけど、自称なので本当かどうかは俺には分からない。

本当であることを祈るばかりだ。

「ほら、秋彦見ないと次のページ行っちゃうよ？」

さつさと読めと催促してくる姉貴。

今は、従うのが得策だと諦めて俺も本を読み始めた。

委員長の通信簿 5

今日の天気は快晴。

昨日の晩の天気予報どおりカラッと晴れた朝だ。

チラッとカバンの中身を確認する。

昨日姉貴と一緒に見た恋愛指南書（女の子用）が入っている。

ただ一つ誤算があるとしたら、昨日中々姉貴が寝かせてくれなかったってことだ。

10時ごろから見始めて、読み終わったのが夜中1時。

普段12時には必ず寝ている俺からしたら、かなりの夜更かしだ。

「ふああ〜」

たまらず、あくびが出る。

「また夜更かししたの？昨日から連続じゃない。なにか悩みでもあるとか？」

隣を歩いていた佐奈が、たずねてきた。

「いや、そんなことは無いんだけど。昨日姉貴が中々寝かせてくれなかったからな。かなり寝不足だ」

「ふうん、瞳姉が寝かせてくれなかったんだ。……姉弟で、そんな関係なんだ。いやらしい〜」

汚らわしいものを見るような目をして、俺からササッと距離をとった。

「おい！何を想像したんだ？！」

「うわ、女の子にそんなこと言わせるんだ……この変態！」

いきなりの罵倒。理不尽だ。

「言葉に出来ないようなことを想像するお前のほうが変態だ！」

「あ、秋彦に変態って言われた！？変態に変態といわれるなんて……」

……屈辱！」

「いつから俺が変態になったんだ！？」

「そんなの、人類が誕生する前から決まっていたことよ。今更言っ

てんの？」

「マジかよー！」

「嘘に決まってるじゃん！ばっかじゃないの？しかも、今のやり取り全部冗談だしね。もしかして、ほんとに私が変なこと想像してたとも思っただの？」

「ばかだなあゝって、笑顔で言いながら俺から走って逃げていく。寝不足で追いかける気力も起きない。」

「はあゝ、昨日も言ったけど、あいつのああいう顔を見ると特に起こる気力もなくなってしまうし。まったく、ずるい奴だ。」

とにかく、今日は佐奈にかまってられない。とりあえず、今井と話さないと始まらないよな。」

店長に色々言われたけど、この計画をやめるつもりなんて毛頭ない。」

毎日が退屈なら自分が行動を起こして変化をさせる。」

このことを俺はキサラの言葉で気がついた。」

だから、今井もこのことに気がついたらあんな顔をすることも無くなると思う。」

よし、一つ気合入れていきますかね？」

「あれ？今日は夫婦で一緒に登校しなかったのか？」

教室に入ると北原がいきなり話しかけてきた。」

「今井が座っている席のほうを見ると、いつもどおり今井が北原を見ている。」

ただ、いつもと違うのは俺の視線に気がついたのか、あわてて視線を逸らした事くらいだ。」

「毎日ずっと一緒にいるわけじゃないぞ？」

「そうか？俺にはずっと一緒にいるっていうイメージしかないんだけど。まあ、お前と平久保さんが離れてくれてるほうが、俺には好

都合なんだけどな！」

「そうか、それは良かったな」

「うわ、何その言い方は？全然ライバルとして見られてないってことか？！」

「そもそも、なんのライバルだよ？」

「もちろん、平久保さんを巡る争いのライバルに決まってるじゃねえか！」

「あほらし」

そう言つと、俺は北原に背中を向けて自分の席のほうへと向きを変えた。

「余裕ぶっこいていられるのも今うちだからな！すぐに、その余裕そんな顔を悔しそうな顔に変えてやるよ！」

北原が何か言ってるけど無視だ。相手にしてるだけ無駄だし。

北原を無視して歩き出そうとしたときに、先に学校についていた佐奈が話しかけてきた。

「ずいぶん楽しそうな話してるね。秋彦遅かったじゃん。てっきり追っかけてくるもんだと思ってたから、突然居なくなったみたいで結構びっくりしたんだよ？」

「こっちは寝不足でしんどいんだよ。走る元気なんて無い」

「そっかそっか、まあいいや。別に用事があるわけじゃないし。それじゃ」

そういうと、佐奈は自分の席へと向かっていった。ふと、妙な威圧感を感じたので振り向くと、ものすごい形相の北原が居た。

むしろ、鬼がいたって言うてしまってもいいくらいすごい顔をしている。ヤバイ、噴出して笑い出してしまいそうだ。

「くそ！すぐ近くに俺もいたのにスルーかよ！ちくしょー！！」

北原がそう叫びながらいつもどおり教室から走り出していった。

毎日毎日良くやるよ。

例の如く、今井は……以下略。

そんなに、気になるなら直接話すればいいのに。

まあいい、とにかく行動を起こすのは昼休みだ。
午前中の授業の間に、どうやって話をするか考えないとな。

「なあ、佐奈。どういう風に話しかけられたら、女子ってついてくるんだ？」

「どういう風に今井に話しかけるかを、午前中の授業中ずっと考えていたんだけど結局答えが出なかった。」

そして、藁にもすがる気持ちで佐奈に聞いて今に至る。

「秋彦、もしかしてナンパでもするつもりなの？」

軽く引きつった顔をした佐奈が尋ねてくる。

「いや、そういうつもりは無いんだけどな。ちょっとした興味って言うか」

「ふーん、そうなんだ。っていうか、面識の無い人から話しかけられても絶対私なら無視する。係わり合いになりたくないし」

「じゃあ、面識ある奴ならどうなんだよ？」

「ん？それって、友達って事でしょ？じゃあ、普通に話し位するわよ。例え北原君でも」

「ここで俺の名前が出てくるか！？」

突然、隣に座っていた北原が大声を出して立ち上がった。迷惑だから、騒がないで欲しいんだけど。

「よかったな、話しかけられて。今の気分はどうだ？」

「ものすごく複雑だよー！」

「突然ただのクラスメートに話しかけられたら、複雑な気分になるらしいわよ？」

弁当を食べながら、さも当たり前のように言う佐奈。

小さいときから口が悪いとは思っていたけど、ここまで悪いとは思ってなかった。

というより、最近はこの毒舌の標的になってなかったただけなんだ

けど。なんというか、北原ご愁傷様だな。

「まあ、冗談は置いておいて、私は弓道のミーティングがあるからそろそろ行くね。あ、北原君」

「はい！なんでしょう？」

「あんまり大声出すと迷惑だから、食事中はあんまり騒がないようにしてね」

「どちくしょー！！！」

そう叫ぶと、北原は例の如く教室から走って出て行ってしまった。まあ、あれだけおもちゃにされたんだから、誰でもあぁなってしまっただろうな。

「うーん、最近北原君のリアクションにも飽きてきた。どうしてもリアクション芸人ってワンパターンばかりなんだろーね」

「いや、あいつ芸人じゃないし」

「そうなんだけど、どうしても上。竜平みたいな気がするのよね。まあいいわ、とりあえず私いくから。秋彦はしっかり噛んでご飯食べるように。それじゃ」

そういうと、忙しそうに佐奈も教室を出て行ってしまった。

「さて、と」

残っていた弁当を口の中へ掻き込んで、教室を見渡して今井を探した。

いつも食べている女子の集まりの中には居ないみたいだな。じゃあ、あいつの席は……あ、居た。

自分の席で本を読んでもみたいだ。

うーん、本を読んだときに人に邪魔されるのって、ものすごく嫌な気分になるからなあ。

けど、今を逃すと放課後までチャンスないし。……よし！とにかく行ってしまおう！

そうと決まれば、さっさとやってしまおう。

俺は弁当を片付けると、そのまま今井のほうへ歩いていった。

今井のほうへ近づいていった俺は、今井の読んでいる本を見た。ちょうど挿絵のページが開かれていて、その絵は俺も見たことのある絵だった。

ブックカバーで表紙は隠されているけど、確実にそれはライトノベルと分類される本だ。

「その本って、もしかしてと。ドラ！か？」

本に集中していたのか、俺が近づいていたことに気がついてなかったらしい。

俺が声をかけたときに、肩をびくつとさせて驚いていた。

「な、なに？なんか用？」

読んでいた本を慌てて胸の前でぎゅつとかばうように隠した。

「その小説、おもしろいよな！俺もハマって一気に最後まで読んだよ」

「そ、そう？」

「おう、そうだよ。っていうか、今井もそういうの読んだな。もとと、普通の文学小説とか読んでそうないメージだったんだけど」

「別にいいでしょ。……こういう小説の挿絵って絵が可愛いじゃん」

「まあ、確かに可愛く描かれてるよな。ターゲットが男の子だし」

「私ね、こういう可愛い絵が好きだったりして、結構読むのよ。内容もおもしろいし」

「確かに面白いよな。厨二設定とかハーレムとか多いけど」

「厨二ってなに？良くわかんないけど、まあ、そのこういうのが好きなのよ。なんかオタクっぽくて恥ずかしいけど」

あ、そういう自覚はあるんだ。

「恥ずかしいんだったら、家で読めばいいだろ？こんな見つかりやすい場所で読まなくてもさ」

「あんたも言ってたでしょ？一気に読んだって。それくらいおもしろいんだから、続きが気になって仕方ないもん。とにかく、他の人には内緒だよ？知られるの恥ずかしいから」

お前はツンデレか？俺にデレても仕方ないんだぞ？わかってんの

か？

「誰にも言わないよ。あとさ、今からちよつとだけ時間あるか？すこし話があるんだけど」

「話って私に？まあ、いいけど。少しだけだよ？続き読みたいし」

「じゃあ、とりあえず屋上に行こうか」

こうして、俺は今井と屋上へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0424t/>

君の物語

2011年9月16日03時15分発行